

とされない知の在り方が可能ではないか、という問いである。これはアウグスティヌス以後より明瞭となる神学的理性 (intellectus fidei) の問題でもあり、先に立てられた「人間学」のさらなる根拠を問うものであると言える。——こうして〈知識と信仰〉のテーマは、アウグスティヌス自身の苦悩のさまを今日のわれわれに見せると共に、以後負い続ける問題にわれわれ自身どう関わっていくかをきびしく問うものであったと言ってよいであろう。それ故、時にはげしく争われ、時に錯綜の迷路に踏み込んだ今回のシンポジウムは、明日への活動のよき源泉となったことを信じて疑わない。

提題

理性と権威

岡野昌雄

アウグスティヌスにおける知識と信仰の問題の発端は、彼のマニ教経験に深く関わっていると思われるが、その問題がどのような状況の中で生まれ、どのように展開して行くかを、特に彼の初期著作を中心に辿ってみたい。なおここで初期というのは、彼の回心から司祭叙任まで、すなわち386年から391年までの6年間を考えている。

(1) アウグスティヌス自身の説明によれば、知識と信仰の問題はマニ教入信に際して理性と権威の対立という仕方では自覚されるようになった、つまりこの問題が入信動機の大きな要因の一つであったということである。マニ教徒は、カトリック教会のように理性よりも先に信仰を命じるのは迷信であると非難し、自分たちは権威への信仰を強要せず、理性による知識を与えると公言していたが、アウグスティヌスはこの約束に魅かれてマニ教徒の仲間に加わったと述べている(『至福の生』1, 4:『信仰の有用性』1, 2)。

ケケロの『ホルテンシウス』によって知恵の愛、すなわち哲学に目覚めさせられたアウグスティヌスは、幼時から教えられていたキリスト教信仰のうちにそれを求めるが、聖書はまるで老婆の語るおとぎ話のようであり、それを批判するマニ教徒の主張がもっともらしく思われた。ここで彼が求めていた知恵は、人間を究極的に

至福たらしめるものという意味での真の哲学であり、また真の宗教でもあった。しかしそれは、当然のことながら、根拠薄弱であいまいな権威を信じることによって得られるものではなく、明白な論拠に基づく理性の道によって探求されるべきものであった。従って、アウグスティヌスは、ここで宗教ないしキリスト教そのものを非理性的なものとして捨てたわけではなく、かえって真の宗教、真のキリスト教を求めてマニ教に入信したと言える。その場合、権威は、理性によって論証できない事柄を信じるように強要するものとして、否定的に考えられている。

(2) しかし、やがてマニ教の教理が虚妄に満ちたものであることを知り、しかも彼らが十分に論証できない事柄についてはただ信じることを強要するのに飽き足りなく感じるようになったが、それに代わるべきものが見出されないまま、結局真理には人間理性は到達できないのではないかと疑い、アカデミア派の懐疑論に同調するようになった。いわば宙ぶらりんの状態に陥ったわけであるが、信じることの有用性を自覚するようになったのは、この頃ではないかと思われる。アカデミア派は、虚偽を恐れて何ものにも同意を差し控えなければならないと主張するが、実際生活においてはそのことは不可能であり、彼らはいわゆる蓋然性ないし似真性に従って行動することを勧めていたからである。つまり十分の根拠はないものの、もっともらしいと思われるものに従って行動することは認めていたのである。自分が直接に見聞して知っているのではない事柄や確証のない事柄をわれわれは信じており、時としてはそれを「知っている」とさえ言う。こうした信頼の上にわれわれの社会生活は成り立っており、信じるということは一切認めなければ、われわれの生活はもはや一日として立ち行かなくなってしまう。彼はこのような事実を通じて、マニ教徒の非難が不当であり、信じるということがいかに有用かつ必要であるかを自覚するようになったのではないかと思われる。しかし、そうした自然的で有用な信頼というものが、そのまま宗教的権威への信仰につながるわけではない。

(3) さて、アウグスティヌスの思想形成において最も強い影響を与えたのは新プラトン主義とアンブロシウスであった。彼は探し求めていた真の哲学をこの新プラトン主義のうちに見出し、またアンブロシウスを通して、おとぎ話のように見える聖書の中に彼の理性を満足させるものが含まれていることを知った。知識と信仰の問題はこうして新しい局面を迎え、明確な形をとってあらわれるようになった。

知恵の探求は、アウグスティヌスの場合、哲学であると同時に宗教でもあったが、新プラトン主義的な魂の上昇とキリストの救い、認識の完成と神の直視、プラトンの英知界と神の国とがそれぞれ同一視され、両者は基本的に一致するものと考えられている。神の認識に到達した者のみが知者であり、至福であるが、新プラトン主義の目ざすところはまさに真の宗教たるキリスト教の目ざすところでもあった。新プラトン主義者を傲慢な者たちと批判しつつも、彼らの教説を虚偽として拒けている箇所は初期著作には見当たらない。しかし、理性のみに頼って神の認識に到達できるのは極く少数の者にのみ許されることであり、大多数の者にとってはそれに至る何らかの手引き・導きが必要である。権威こそが人間にとってそのような道を開くものである。永遠的なものの認識に至る準備として、権威は魂を訓練し、そのような認識に適わしいものに浄め、育てるものである。それはすべての者に開かれた容易な道である。そのようにして、権威への信仰は認識への準備、出発点、或いは魂を浄化する道として位置づけられるようになる。ここに初期著作に共通する、認識の二つの道である理性と権威の関係についての一つの図式が出来上がる。作表的な箇所として、『アカデミア派駁論』、III, 19, 42—20, 43：『秩序論』II, 5, 15—16；9, 26：『カトリック教会の習俗』2, 3：『魂の偉大』7, 12：『真の宗教』¹⁾24, 45等が挙げられよう。

これらの箇所ではいずれも、知識に至る道として理性と権威を区別し、権威は信仰を要請し、人間を理性へと準備するもの、理性は理解と認識へと導くもの、すなわち知恵の探求という目標からすれば理性が権威に先行するが、時間的には権威が理性に先行するとされている。人間の魂の汚れのゆえに先ず権威が与えられており、従って魂の浄化が第一であり、魂を浄めるために真なるものを見ようとすることは本末転倒であると言っている。ここで重要なのは、理性への準備としての権威の問題であろう。人間が究極的な目標とする理性による知恵の認識については新プラトン主義とキリスト教に一致するものを認めつつも、両者が異なる点はまさにこの権威であり、またマニ教批判の要もここにあったからである。そしてアウグスティヌスにおける知識と信仰の問題をめぐる思想展開の重要な鍵になると思われる。

マニ教徒は権威への信仰を命じるキリスト教を迷信であると非難し、理性的な根拠のないままに信じる軽信を拒けた。だが、軽信と信仰とは、信じるという点では

共通するものの、やはり根本的に異なるものである。軽信は何でも信じるが、信仰は信ずべきもの、信頼に価するものだけを信じるからである。それでは、そのような信頼に価する権威とは何か。真の権威とにせの権威をどこで見分けるか。この点についてはアウグスティヌスはかなりオプティミスティックで、教会の伝統にそれを求めているようである。そして、権威によって欺かれることは惨めであるが、しかし権威によって動かされないことはいっそう惨めであると言っている。

神的権威は信仰の基礎であるが、それはただ人間の能力を越えているばかりでなく、人間を導き、人間のためにどこまで自らを卑しめたかを示す。ここにキリストの受肉について触れられているが、キリストは、人間が感覚的世界にとどまることなく知性にまで上昇するように命じる、知識への不可欠の道として、また感覚的世界への墮落と不浄から浄め、魂を英知的世界へ導くものとして理解されている。ここに新プラトン主義との共通点とまた相違点を見ることができる。つまり墮落し不浄となった魂が感覚的世界から英知的世界へ上昇することをキリストによる救いと同一視する一方で、それが肉となったキリストの権威によらなければならないとした点である。

ところで、知識に至る道としての権威には二つの役割がある。一つは魂を浄化して理性へと導くことであり、もう一つは理性によって理解すべき事柄をあらかじめ示すことである。権威を信じることによって人間の精神は浄められ、かつ何を知るべきかを示される。従って、権威は人間にとって知識に至る不可欠の道であると同時に、それはあくまでも道であって、そこに留まり続けることはできず、信じた事柄を理解するように努めなければならない。

このように、初期著作においては、理性による認識を究極目標としながら、理性に先立って権威を信じるが必要不可欠であることが力説されている。そして、新プラトン主義とキリスト教が多くの点で一致するものと考えられながら、肉となったキリストの権威という点で両者は根本的に異なるものとされる。しかし、初期著作においては、そのキリスト理解そのものが、聖書的表現にもかかわらずなお新プラトン主義的な色彩を強く帯びたものであることは否めない。理性と権威の関係は、神的権威としてのキリスト理解、すなわちキリスト論に連なると同時に、単に理性への準備としてではない信仰の固有性、すなわち信仰のみによる神の直視の可

能性の問題にも連なって行く。それは、彼が人間の罪性の自覚を通じてやがて恩寵を強調する、彼の人間理解の深まりに呼応しているように思われる。知識と信仰の問題は、こうして、単に認識論の問題としてではなく、彼の哲学的神学的人間理解の問題として、広いパースペクティブの中でとらえることが必要ではないかと考える。

提題 アウグスティヌスにおける信仰と知解

宮谷 宣史

アウグスティヌスは信仰と知解に関し体系的な論述は企てなかったが、しかし、両者の関係については多く言及している。以下、彼の基本的な考えをまとめて、議論の材料に供したい。

1 信仰について

1.1 人間は幸福、真理、最高善を求めている。アウグスティヌスにとりそれは三位一体の神である (C. Acad., I, 3, 9 : De tr., VII, 6, 12)。

1.2 人間はこの神を信じ、知解しようと欲している (C. Acad., II, 20, 43 : De mor. cath., 14, 24 : De tr., I, 2, 4 ; II, 13, 24 ; XV, 5, 7)。

1.3 信仰は神についての権威ある教え (教会、聖書、信条) を聞き、それを知解し、それに同意することから始まる。つまり、権威と理性が人間を信仰に導く助けとなる。しかし、一般には、権威が理性に、信仰が知解に先行するかたちをとる (De ord., II, 9, 26 : Tr. in Joh. ev., 22, 2 ; 27, 9 ; 15, 24 : Ep., 120, 3 : Enarr. in Ps., 118, 18, 3 : Serm., 43, 8)。

1.4 信仰が先行するのは、神の不可視性のゆえで、まず信じる以外になく、また神を完全に知ることが出来ないためである。この故に、信仰は見えないもの信じること、現存しないものの現在、と定義される (Tr. in Joh. ev., 40, 9 : De tr., XIII, 1, 3 : De praed. sanct., 5 : Serm., 43 : De sp. et litt., 54 : Enchir., 2, 8)。